

帝塚山友鏡

丸尾壽郎

庄野英二に「帝塚山風物詩」(垂水書房一九六五年刊)という隨筆集がある。その中の一篇「続赤駒房附近」に、こんな話を書いてある。

「山本看護婦会から道を一つ距てた北側に二軒続きの家があり北側は山口さんという小ぢぎつぱりした隠居さん夫婦の家であつた。山口老人の北側が長さ五十米ほどの広つばで、北の端は中原家の邸宅であつた。その広つばが僕たちの専用野球場であつた。(中略)ホームベトスは南側で山口老人の家の板壁がバックネットがわりになつてゐた。私たちにとつて老人の家がおあつらえ向きのバックネットであつたが老人の家では非常にめいわくであつた。一番よくボールの当たる所が仏間の壁らしい様子であつた。ボールが強くとると仏壇の中の位牌や燭台が倒れるらしいのであつた。

ボールが二、三回続けて当たると必ず老人が抗議に出てきて

「お仏壇が倒れるやないか」

と怒つた。こちらはお仏壇を倒す気はない

のだが、エラーや暴投があると不可抗力であつた。山口老人も御近所の子供たちだといふため余り強く怒つたりいじめたりすることもできなかつた。「お仏壇」を持ち出せば大儀名文が通り怒りやすいと思つていたのであろうか。ベランダに盆栽の植木鉢を並べて清閑の暮しを老夫婦でしてゐたのだが、私たちの野球でいつも妨害されてゐたのであつた。誠に今から思えばお気の毒であつた。(下略)

山口老人というのは、実は私の祖母の姉のつれあいで、帝塚山に退隠するまでは市内の平野町で呉服屋を営んでゐた。この山口保志於夫婦に子供が二人いて長男が幼遊し弟の

宗次郎というのがあとを継ぐはずであつた。ところがどう間違つたのか芝居道楽が昂じて家をとび出し、誰とのかの一座に入つてそのまゝ、消息が絶えてしまつた。のちに、ひよつこり現われることになるのだが、老夫婦はずつかり落胆してやがて店をたゞみ、郊外の帝塚山に閑宅を求めて隠居したのである。私が小學校に上がる前のことで、満州事變もまだか、始まつてゐたかの頃のように思う。

祖母は何かと氣遣つて、折あることに小間使のフサに届けものを持たせてやつた。私はその都度、フサに連れられて山口の家に行つた。家は、帝塚山学院を創立した庄野貞二氏の板塀をめぐらした大きな邸宅の前にあつて、いとも貧弱に見えた。山口の爺さんは、二三分刻りのゴマ塩頭で、地味な紬の着物に博多献上の角帯をしめ、黒っぽい木綿の前掛けをして、いつ行つても氣むづかしい顔つきで端座してゐた。息子や老い先のことゝが氣がかりでしかたがなかつたのかも知れない。私が行くと、急に顔がほころびて愛想がよくなつた。婆さんは小柄で、ひどく耳が遠かつたが子煩悩であつたので居心地がよく、そのまゝ、三日も泊つたりした。

庄野の三兄弟が近所の小どもたちと隣りの

広っぱで野球をしていたのは私も見知っていた。仏壇のうしろの壁が、ドンと音を立てると爺さんの顔が顰んだが、私がいるので出て行かなかつた。「庄野のボンヤ」と小声で私に言った。

隣りの広っぱは、その東の果てが一段高くなつた大根畑に続いて、小どもの私には広大な草原に見えた。よそ者で幼く、野球の仲間に入れてもらえない私は、兄や妹とバツタやトンボを追いかけて走りまわつた。オニヤンマの、ばさばさとかわいた、あのつよい翅の感触を求めて空を仰いで走りまわつた。その空が、まっかに夕焼けると、大根畑も家も木立ちもそのまゝ、影絵のようになつて暮れた。

—先日、なにかのはずみで庄野潤三の『夕べの雲』(講談社刊一九六五年)を読みかえしていらなつた。つかしい場面に遭遇した。「ムカデ」という章で、小学校二年の時のとんぼとりの日記を引用しながら、こんなことを書いていた。

「きい(二匹つながつた状態)でいるとんぼ)を取つてくると、雄のらっぱは何の役にも立たないから逃がして、雌の「べに」の胸を糸で結んで、体のまわりをゆつくりと旋回させながら、「らっぱ、ほーえ。らっぱ、ほーえ」というのである。すると、らっぱが来て、二

匹は空でからまつて落ちる。そこを捕える。

これが「がちゃがちゃ」であつた。(中略)「がちゃがちゃ」にくらべると、もう少し高級なとんぼの取り方がある。それは「ぶり」であつた。小さな石ころを紙に包んだものを二つ、手頃な長さの糸でつないで、空中に放り上げて、飛んでいるとんぼの体からみつさせる。とんぼは「ぶり」と一緒に落ちてくる。」

(ああ懐しい)私が小学生の頃は市街の住宅地にも、とんぼはたくさんいて、「ぶり」とるのが流行つていた。私は小石でなく小さな鉛の散弾をいくつか加減して使つていた。オニヤンマを狙うので、ムギワラだのシオカラなどには目もくれない。赤とんぼはシヨウジョウのものもあるような緋色のを狙う。オニヤンマは飛行中に停止する瞬間があつて、「ぶり」はそのタイミングを見はからつて投げ上げるのだが、それで屋根に落ちたり電線にひつつかつて、せつつかくの名器をふいにしたりする。

「ぶり」はやはり帝塚山の広っぱで思いつ切り投げ上げるのが楽しかつた。

潤三は広っぱでなく「畑の間にある、水草のよく茂つた、小さな池」のそばで、「らっぱ、ほーえ」をやつたか書いている。だが、「それがどこにあつた池なのか、思い出すことがで

きない」とも書き添えている。

あのあたりには、似たような池がいくつもあつた。今でも思い起すと、夢のように薄明の時のように浮かんでくる小さな池がある。水辺には水草が生い茂りアメンボやミズマシが泳いでいた。水面の青い葉の上にイトトンボやオハグロトンボが来て翅を休めたりした。その青い葉の茂みの下には、たくさんの菱の実が黒く光つて見えた。その尖りは痛そうだった。深閑と静まりかへつた池の向こう

の木の中に灰色の静かな建物があつて、窓はいつも白いカーテンで閉じられていた。そんな風景を飽きもせず汀の木陰に蹲つて眺めていたものだが、万代池でも大領池でもないとしたら、ほんとにどこの池だつたのだろう。あの建物は木造で当時の府立女専の寄宿舎だつたように覚えていたが、違うのかも知れない。

帝塚山の池という、古い絵を見るように、きまつてこの光景が浮かんでくる。が、今はもう遠く遙かな記憶のかたにあって、それとどんなにか雑多なその後の事象に彩られて、錯乱し変容しているやもしれぬ。しかし私たちが、何かのはずみに思い出す幼年時代は、こうした原っぱや池や昆虫などが原風景としてあることは確かなのである。